

令和6年度

宮崎国際大学入学者選抜試験問題

国

語

国際教養学部
教 育 学 部

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子及び解答用紙の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて28ページあります。(問題は2ページからです。)
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁、解答用紙の汚れなどがあった場合には、直ちに手を上げて監督者に申し出てください。
4. 試験開始後、解答用紙の所定欄に受験番号、氏名をはっきり記入してください。
5. 解答は、問題ごとに、解答用紙の指定された箇所に記入してください。
6. 時間内に解答し終わっても、退出することはできません。
7. 試験中に質問等があるときは、黙って手を上げて監督者を呼んでください。
8. 不正行為について
 - ①不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ②不正行為があった場合、その時点で受験を取り止めさせ、退室させます。
9. 問題冊子は、試験終了後持ち帰ってください。

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の文の傍線部A、Bのカタカナに該当する漢字の最も適切な組み合わせを、あとのア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

職を失い途方に暮れた青年は、次第に^Aダラクした生活が続けるようになり、経済的に^Bハタンした。

- | | | |
|---|--------|--------|
| ア | A 惰落 | B 破綻 |
| イ | A 惰落 | B 破端 |
| ウ | A 墮楽 | B 波綻 |
| エ | A 墮落 | B 破端 |
| オ | A 惰落 | B 波端 |
| カ | A 墮落 | B 破綻 |

問二 次の文の傍線部A、Bの漢字に該当する読みの最も適切な組み合わせを、あとのア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

新人の漫画家は、^A斬新な発想の作品が売れ行き好調で海外にも進出し、周囲から^B羨望されている。

ア	Aーザンシン	Bーセンボウ
イ	Aーゼンシン	Bーヨウボウ
ウ	Aーザッシン	Bーシヨクボウ
エ	Aーゼンシン	Bーセンボウ
オ	Aーザッシン	Bーシヨクモウ
カ	Aーザンシン	Bーセンモウ

問三

次の文の空欄に入る慣用句として最も適切なものを、あとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

地方再生のプロジェクトが人手不足で一向に進まず、このまま（

）いると中止に追い込まれかねない。

- ア 手をあげて
- イ 手をこまねいて
- ウ 手にかけて
- エ 手を汚さずに
- オ 手をゆるめて

問四 次の文の傍線部の内容を最も適切に言い表す四字熟語を、あとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

人生の終わりに近づいた陶芸家は、山中の閑居で、わだかまりがなく、さっぱりした心で、ひたすら作品の制作に打ち込んだ。

ア 一心不乱

イ 起死回生

ウ 心機一転

エ 行住坐臥

オ 虚心坦懷

問五 次の文の空欄（ A ）に該当する作家名と（ B ）に該当する作品名の最も適切な組み合わせを、あとのア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

現実をありのままに描く自然主義への反動として、反自然主義の作家（ A ）は知的に人間や社会を捉えた作品を描き、『青年』『雁』や歴史小説『阿部一族』（ B ）などを発表した。

ア A — 泉鏡花 B — 五重塔

イ A — 泉鏡花 B — 高野聖

- ウ A―森鷗外 B―高瀬舟
 エ A―森鷗外 B―夏木立
 オ A―夏目漱石 B―暗夜行路
 カ A―夏目漱石 B―草枕

問六 次の文の傍線部A、Bを正しい敬語で言い換える場合の最も適切な組み合わせを、あとのア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ご来館の皆様、美術展を ^A見た後、地下のミュージアムショップにも ^B来てください。

- ア A―ご覧になった B―伺って
 イ A―拝見した B―お入り
 ウ A―ご覧になった B―お越し
 エ A―鑑賞した B―お入り
 オ A―拝見した B―伺って
 カ A―鑑賞した B―お越し

問七 次の文の傍線部をわかりやすい表現で言い換えるとどうなるか。最も適切なものを、あとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

彼には先見の明があつたので、顧客の購買意欲をそそる魅力的な商品を次々と発表し、傾いていた経営を立て直した。

- ア 古いものを新しいものに变化させる力
- イ 現状を改善して有効に活かす力
- ウ 誰も思いつかないものを発明する力
- エ 関係のない二つのものを結びつける力
- オ 将来のことをあらかじめ見通す力

問八 次の文の傍線部の言い換えとして最も適切なものを、あとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

新しい部署では、部長が担当者に目標と計画を出させ、その成果をもとにフィードバックを行っている。

- ア 協力するために話し合うこと
- イ 全員の価値観を揃えること
- ウ 相手の行動について改善点を伝えること
- エ 固定観念や思い込みを取り払うこと

オ お互いを尊重し合うこと

問九 次の文の傍線部を言い換えるとどうなるか。最も適切なものを、あとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

彼はフランスに三年間留学した経験があり、フランス語が堪能であるだけでなく、文学や美術にも造詣が深い。

ア 詳しく技術に優れている

イ 興味があり専念している

ウ 卓越した能力を発揮している

エ 詳しい知識があり理解に優れている

オ 手を広げ作品を制作している

問十 次の文の空欄（ A ）～（ D ）にあてはまる語句の最も適切な組み合わせを、あとのア～オの中から一つ選び、記

号で答えなさい。

フランスの博物学者ラマルクは、「キリンとはかつて普通の長さの首をもつウマの一種に過ぎなかった」という説を発表した。ウマは木の高い部分にある葉を食べていたが、葉を食べ尽くしてしまい、さらに高いところにある葉を食べるうちに首が伸びていった。何世代にもわたって首を伸ばすという（ A ）が、キリンの長い首を形成したわけである。一

つの世代が、（ B ）に学習して（ C ）した形質が、親から子供へと遺伝することにより生物は（ D ）すると説明した。

ア	A	慣性	B	後天的	C	獲得	D	進化
イ	A	習性	B	先天的	C	喪失	D	退化
ウ	A	習性	B	後天的	C	獲得	D	進化
エ	A	慣性	B	先天的	C	喪失	D	進化
オ	A	習性	B	後天的	C	獲得	D	退化

二 一次の文章は、小池昌代の小説「波を待つて」の一節で、主人公の「亜子」が、夫や息子の「時雄」と一緒に、海に来ている場面である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

夫は、波が好きだった。そうなのは、ここ三年くらいのことで、最初は時雄のために海にきて、自分が波にとりつかれてしまった。^① いい年をして、いい年をして、とにかく彼は、その面白さを知ってしまった。どんな年になっても、はじめて知ることはあるのだという、そのこと自体には、^② 目を見張るようなものがある。しかし……。

^(a) 夫はそれから亜子にとって、少しずつ見知らぬひとになっていった。波と彼とのめぐりあわせだから、ほかの人が何かをいえるようなことではない。ことに波の快楽は、それを知ってしまうと、後戻りはできないものらしい。

はじめたころは、海の家で借りた小さな板が、彼の唯一の波乗りの道具だった。それにつかまって波間からだを漂わせているだけで、夫はじゅうぶんに満足しているように見えた。かわいいものだ、と亜子は思ったが、次の年には、いきなりサーフボードをもって、だれに何を教わるということもなく、みようみまねで沖にのりだしたのだった。海の家で借りたのは最初だけで、すぐに自分用のサーフボードを注文し、そのときも亜子は充分おどろいたのだが、一ヶ月ほどたって、それが本当に出来上がったとき、夫が興奮を静かに抑えているのがわかって、亜子はもはやなにかをあきらめ、笑い出したいような気分になった。

それは特に派手な模様もない、ほとんどただの白い板だった。注文したからにはとくべつな仕様があるのだろうと期待した亜子に、夫はこれで充分だと言った。これが一番シンプルで安いからな。裏側に三つの突起がついていて、それが「フィン」と呼ばれる部分だそう。表側には^(a) 蛸の足のような吸盤状の突起がついた部分があり、ボードのうえに立ち上がるとき、片足を固定する足場になるという。卵の殻みたいなもんだから、すぐに傷つくんだ。ものをぶつけたりしないように大切に触ってくれよ。そう言われて腕にかかえてみたそれは、亜子にも充分持ち運びできるほど軽く、丸みを帯びた曲線が美しかった。

夫の背よりも少し高いサーフボードは、海でなく狭い部屋のなかでずいぶん窮屈そうに見えた。^(b) 亜子までがそれを、早く波間に浮かばせてやらねばと思った。

そんなふうにしてここ数年、家のなかに少しずつ海の道具が増えていき、東京の部屋が、^③ こころなしか、砂のようなもので始終ざらついているような感じになった。

——じゃあ、ちょっと行ってくる。

亜子が背中に日焼け止めを塗り終わると、夫はそれだけを言い残して海へ向かった。沖に出て、波あるいは波のかたちをした何かと出会うために。片手でサーフボードをかかえた後姿は、いつ見ても新鮮な違和感を亜子に与えた。

いま、子供は、亜子のそばで砂山をつくっている。

——ママ見てママ見てママ見てママ見て。

時雄のつくった砂山が、どんどん高くなっていく。

——すごいねえ。

と言う。視線は手元の本のほうに残したままだ。でも、文の意味など頭に入らない。活字など、どれも砂のようだ。目からささらさこぼれおちてしまう。波の音と風の音が、とどまろうとするすべてのものを、かたっぱしから粉碎していく。本の帯には、十年に一度の名作と書いてある。そんなこと、どうでもいいじゃないの。

浜辺にいと、時間の単位がかわる。十年などつかの間、いや、もっと短い。日常で価値を持っていたものが、ここではその価値を急速に失ってしまう。いったい何が無効になったのか。^(c) 浜辺はものごとを漂白してしまう、どこかおそろしい場所である。

子供がまた、ママ見て、と言う。

亜子はようやく視線を移す。すごいねえ、と言う。すごいねえ、時雄は。なにかもつと、ほかの言葉を、時雄にかけてやれないものかと自己嫌悪に陥りながら。

時雄は海を怖がって泣く。おおきな波が嫌いだと言う。がたがたと唇をふるわせて、海に入ることを拒否する。^(d) それを笑い、

ほら大丈夫よ、と言っているこちらのほうが、だんだん、残酷な仕打ちをしているように思われてくる。亜子はがっかりし、弱虫だと思い、都会っ子はだめだなあとため息する。けれど自分もまた、海が嫌いだった。自分も弱虫で都会っ子だった。海を前にして、ふるえるように浮き輪につかまっている暗い目をした少女のころの証拠写真がある。

——何をこわがってるの、ほら、前に進んでごらん、ずんずんずんずん、ママと海のなかに入ってみようよ。

口に出してそんなことを言いながら、ほんとは海はこわいよね、と亜子は思っていた。海はこわいよ。なんでだか、よくわからないけれどね。

砂はどこまでも真っ白で、じっと見ているとそれだけで目が焼けそうだ。時雄の砂山を手伝ってやる。むこうから掘ってごらん、ママはこっちから掘っていくからね。すると、途中でトンネルが開通する。亜子の指が時雄のやわらかい指先に触れる。時雄が笑う。

しばらくそうして遊んだあと、亜子はもう一度、時雄を海へ連れていった。相変わらず、おびえて水のなかに入ろうとしない。亜子はしかたなく棒立ちになって、自分の足元を、見下ろした。

波がひいていくとき、足のまわりから砂が流れて、まるで自分がうしろに急速に下がっているように錯覚することができる。なにかおおきな、とんでもない力によって、自分がこの世からひきずりおろされていくようだ。

^(e)——ほら、自然のエスカレーターだよ。見てごらん。

動く歩道とは逆に、後ろ向きに進んでいくエスカレーター。ほら、見てごらん。

時雄はその錯覚が気に入ったようだ。もしかしたらほんとうに、うしろに進んでいるかと思っているのかもしれない。そして亜子自身も、自分がどんどん削り取られていくような、その錯覚を楽しんでいる。最後、内臓まですっかり引きずり出されて、白骨になった自分を想像する。そこまですぐだ。

——時雄、もっと、先まで行ってみよっか。

亜子は時雄の手を握る。時雄は亜子の手をきつく握りかえす。

ずいずいずい、ずいずいずい。ふたりは海のなかへ入っていく。

時雄が笑い出す。時雄は、どんどん歩いていく。けれど高い波がきた。逃げようとして、ふたりは間に合わない。時雄は頭からざぶんとかぶる。水着でない亜子も波をかぶった。パンツが濡れた。Tシャツもスカートも、ぴったり濡れてからだにはりついている。時雄は大声で泣き出した。亜子は逆に笑い出した。するとからだが明るくなり、内臓にまで太陽の光がさしこんだ気がした。時雄は泣く。亜子は笑う。けれど亜子は自分たちが、まったく同じことをしているのだ、と思った。

——時雄、泣くな！ ママがついてるよ、海なんか、こわくない、海なんか、こわくない！

自分に叫ぶように、時雄をなだめる。こんどはまるで怒っているようである。泣くのも笑うのも怒るのも、ここではみんなひとつのことなんだ。

（でも、海はこわいよ、波は妖怪だよ）

そう、波は妖怪だ。そしてあのひとは、もう、この世では海にしか棲息しない妖怪というものに会いにいった。

——パパどこにいったの？

^(f) パパがいまここにいないことと、海のおそろしさが関係あるとでもいうように、時雄はきゆうに、父親の行方を案じた。

夫はたいてい、浜からさつといなくなってしまう。おそろく沖のほうへ流されていったのだろう。もう、三時間くらいになるだろうか。昼食のあと、浜へ一度も戻ってこない。パパ、どこへ行ったんだらうね。亜子は時雄といっしょに、途方に暮れて沖のほうを眺めた。

夫はそもそも、海など好きな男だったらうか。亜子は考えても思い出せない。学生のころ、ずっと水泳部だったと聞いたことがある。だから泳ぐことは、たぶん得意で好きなのだろうと思う。

いま彼は、女子大で国語表現という科目を教えている。一種の作文教室みたいなもので、学生たちに文章を書かせ、指導するのが仕事である。彼は長いあいだ、新聞社の出版局で働いていたのだが、いまの女子大に知り合いがいて、乞われて五年くらい前に専任になった。

いままでは、大学が休みになると、どこへ出かけるでもなく、ほとんど一日中家のなかについて、読書にふける人だった。それがここ三年くらいは、休暇前から、計画をたて、海の近くへ宿をとる。ホテルでなく民宿とかペンションで、泊まっているのは若者たちがほとんどだ。先に夫が行き、亜子と時雄があとから追いかけることが多い。夫はひとりでも海へいきたいという。むしろ、ひとりになりたがっているように見える。サーフィンは確かに集団でやるスポーツではない。行きと帰りはたとえ人といっしょでも、海の上ではみな、ひとりきりだ。

サーフィン仲間といえるような友人もない夫は、正真正銘、孤独で、年くった、素人サーファーであり、そもそもサーファーと呼んでいいのか、これから先に展望があるのか、よくわからない、とにかく波にイカレタ男だった。

（小池昌代「波を待つて」『タタド』所収）

問一 傍線部①～③の本文中における意味として最も適切なものを、それぞれあとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

① いい年をして

ア 何かに挑戦するのにふさわしい年齢だから

イ 若者がするようなことを始める年齢ではないのに

ウ 夫の年齢ではマリンスポーツは危険なのに

エ どんなことを始めてもいい年齢なので

オ 子供のために年齢のわりに無理をして

② 目を見張るようなものがある

ア 始めたばかりのサーフィンが上達したことに驚き賞賛する

イ 他の事をないがしろにしてサーフィンに熱中することに驚き怒りを覚える

ウ 面白いと思ったことにすべてをかける姿勢に驚きあきれる

エ 年齢に関係なく新しいことに挑むことに驚き感心する

オ サーフィンをする以前の夫とはあまりに違う姿に驚き戸惑う

③ こころなしか

ア 思った以上に

イ どこからどこまでということもなく

ウ 不満があるかのように

エ なんとなく

オ 望んでいないのに

問二 傍線部(a)「夫はそれから亜子にとって、少しずつ見知らぬひとになっていった。」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高価なサーフボードを亜子に相談なく購入して、休みごとに一人で海の家に出かけるようになった夫が、亜子にとって愛情を感じる家族とは思えなくなった。

イ 息子のために海に行ったにもかかわらず、自身が海の面白さに夢中になってしまい、息子と一緒に海の家泊まるようになった夫とは、次第に夫婦関係が希薄になり、亜子にとって冷たい人間に感じられるようになった。

ウ 初めて波に乗った時からサーフィンの魅力に惹かれ、自分用のサーフボードや道具を購入してのめり込んでいく夫が、亜子にとって次第に理解できない人物になっていった。

エ サーフィンに夢中になり、亜子や息子との会話が減って、家族よりも海の仲間を大切にするようになった夫が、亜子にとって不愉快で嫌な存在になっていった。

問三 傍線部(b)「亜子までがそれを、早く波間に浮かばせてやらねばと思った。」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、

あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 亜子にとってサーフボードは家の中にあつては邪魔な物なので、夫に少しでも早く海に持っていってもらいたかったから。

イ サーフボードは思ったより軽くて形が美しく、亜子は愛着を感じて、狭い家の中ではなく、サーフボードが本来浮かべられるべき海に持っていってあげたいと思ったから。

ウ 新しいサーフボードを購入した夫から、傷つきやすいから大切に扱ってほしいと言われて心配になり、家から持ち出して海辺に置きたかったから。

エ 狭い家の中に置かれた大きなサーフボードは、家の天井にあたり家具にぶつかり、その窮屈な様子に耐えがたい苦痛を感じたから。

問四 傍線部(c)「浜辺はものごとを漂白してしまう、どこかおそろしい場所である。」とあるが、それはどういうことか。最も

適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 浜辺は波音と風音だけが耳に響いて他の音はかき消され、時間であれ、文字であれ、すべてのものが意味を失う非日常の特別な場所である。

イ 浜辺は波によって徐々にそこにあるものが形を変えていき、やがてすべてのものは研ぎ澄まされ、色さえも取り除かれて真っ白な状態になる不思議な空間である。

ウ 浜辺で本を読むと波の音や風の音に邪魔されて、文の意味や活字が頭の中に入っていないか、どんな名作でもつまらない作品になっていく異次元の空間である。

エ 浜辺は夫との過去の思い出を消し去り、夫に不満を持つ自分の心をきれいにしてくれる時空を超越した場所である。

問五 傍線部(d)「それを笑い……残酷な仕打ちをしているように思われてくる。」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、

あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 砂山を一生懸命に作っている時雄に、優しい褒め言葉をかけてやれないことを自嘲し、無理矢理に海に入れようとしているから。

イ 大きな波が嫌いだという時雄の様子に、幼い頃の自分と同じ弱さを感じて、どんな恐怖も克服しなければならないという厳しい現実を突きつけているから。

ウ 波を嫌がり海に入ることを拒む時雄に、幼い頃の自分を重ね合わせ、海を恐れる息子の気持ちをわかりながらも海に入

ることを無理強いしているから。

工 海を怖がる時雄に落胆して、あきれて嘲笑すると同時に、都会で育つ息子に自然への畏怖心を教えようと海に入ること
を強要しているから。

問六 傍線部(e)「――ほら、自然のエスカレーターだよ。見てごらん。」とあるが、この言葉には亜子のどのような心情が表れているか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 海に入れない時雄に波の自然な動きを教えて、恐怖心を振り払い一人で海の中へ入っていきけるような強さを持つてほしいと切望している。

イ 波がひいていくときに後ろに下がっていくような面白い錯覚を亜子自身が楽しみ、時雄にもその面白さを伝えて海への恐れを少しでもやわらげたいと思っている。

ウ 波と戯れて自分が波に削り取られていく不思議な錯覚にとらわれた亜子は、時雄に自分がこの世から引きずりおろされるような自然の力を感じてほしいと願っている。

エ 帰るまでもう一度時雄を海に入れたいと思うあまり、波に乗ってどこまでも進んでいく錯覚を利用して、時雄を海に一步でも近づけようともくろんでいる。

問七 傍線部(f)「パパがいまここにいないことと、海のおそろしさが関係あるとでもいうように」とあるが、本文では「海のお

そろしさ」について表現を工夫した箇所がある。それを説明したものとして最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 亜子に日焼け止めを塗ってもらい海に向かう夫についての「沖に出て、波あるいは波のかたちをした何かと出会うために」という表現は、海の中で波のかたちをした得体の知れない幻覚が、夫を恐怖に陥れ、危険にさらす可能性を象徴的に表している。

イ 時雄が波を怖がり泣く場面の「がたがたと唇をふるわせて、海に入ること拒否する」という表現には、海に入るようにしつつこく言う母親に対して怒りを感じ、断固として海を拒絶する頑かたな一面が描かれている。

ウ 亜子が「ママと海の中に入ってみようよ」と口に出しながら、「海はこわいよ。なんでだか、よくわからないけれどね」と心の中でつぶやく表現は、亜子の心の底に潜んでいる海に対する漠然とした不安を効果的に表している。

エ 泣き出す時雄をなだめる場面の「そう、波は妖怪だ。そしてあのひとは、もう、この世では海にしか棲息しない妖怪というものに会いにいった」という表現は、映画の一場面のような巨大な生物が夫を飲み込んでいく情景を彷彿ほうふつとさせる。

問八 三年前に比べ、今の亜子にとって夫はどのような存在に変化したか。八〇字以内で記述しなさい。

二 二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

近年、高校や大学で、インターネット上の記事をそのままコピーしてレポートを作成してしまう学生のことがよく問題になります。また、単純な「切り貼り」ではないにせよ、文章作成のデータを集めるのに図書館ではなくインターネットを活用する人は①ゲキゾウしています。報道の仕事に関わる人が、十分な取材なしにネット情報を利用して誤報を引き起こしてしまった例もあります。

情報収集にインターネット検索が②パンに活用されるのは、図書館での調べものや現地取材に出かけるよりも、そのほうがずっと手軽だからです。これを好ましくからぬ傾向と見る人々は、レポート作成でネット情報を利用するのを禁止すべきと考えるかもしれません。

他方、こんなふうに考える人もいます。いったいネット検索と図書館の調べものとはどこが違うのか。図書館の本や事典の情報を引用するのなら、ネットからコピーをするのと同じではないか。昔からどんな引用もなしに文章を書くことは稀^{まれ}だったのだから、かつて多くの人が図書館でしていたことを、いまではネットでするようになっただけではないか、と。

(a) 確かにこの二つの調べもののスタイルはよく似ています。図書館の机に本を何冊も積み、あちこちの本から引用してレポートを書くのは、インターネットのあちこちからの引用を並べてレポートにすることと大差ないのかもしれませんが。しかし、知識のあり方として見た場合、(b) この二つの方法には、単に「便利になった」というだけでは済まされない違いがあるのです。

まず、図書館に入っている本は、誰でも自由に出版できるものではありません。それぞれの分野で定評のある、あるいは定評を得ようとしている作者が、自分の書き手としての社会的な評価を懸けて出版したものです。たとえ間違いがあつたとしても、その責任の③シヨザイははっきり特定の作者にあるわけで、作者はできるだけ間違いがないように心がけています。これに対してインターネットでは、知識の作り手が④トクメイ化されがちです。図書館の本が「誰かの知識」であるのに対し、ネット検索

でヒットするのは「みんなの知識」となりやすいのです。もちろん、ネット情報は常にトクメイではなく、多くの場合、何らかの注¹ ハンドルネームをもつ作者によって書かれています。しかし、ネット上の名前と現実世界の特定の個人が常に対応するわけではありません。むしろインターネットは、そこに書かれていることが誰か特定の個人のものだという観念を弱め、知識は「みんな」で作るものだという発想を強めていくのです。

(c) このことは、インターネットが可能にする文化世界の可能性と困難を示しています。いまや知識はケン^⑤イ主義から解放され、誰もが自由に参加して書き換えていくことができるかのようです。しかし、どんな知識も「みんなのもの」となってしまうと、その向こう側にいる特定の書き手に行き着かない、つまりその知識の責任が誰にあるのかがあいまいになります。本の内容が間違っていたら、責任は作者にあります。

A、ネット上で書かれていることが間違っていたとき、その責任は誰にあるのでしょうか。

もともとこの違いから、(d) 私たちの知識がそもそも図書館の本のようで、インターネットのように「みんな」で知識を作るのはごく最近の逸脱なのだと考えてしまうのは誤りです。事実むしろ逆、つまり図書館の本のように知識の作り手が誰であるかがはっきりするようになったのこそ、ここ数百年のことなのです。十五世紀半ばに発明された活版印刷が普及し、自分の著作を出版することが知的活動の根本をなすようになった十七世紀以降、「作者」の観念や「著作権」の制度が発達します。知識の作り手は、このような観念や制度の普及を通じて確立されたのです。

もう一つ、図書館の本とインターネットの情報の間には、知識の体系性という観点からの違いもあります。知識は、ばらばらにある情報やデータの集まりなのではありません。知識とは、概念の内容や事象の記述が相互に結びつき、体系をなしている状態のことです。当然、そこには中心となる知識と派生的な知識、つまり事の軽重があります。中世ヨーロッパでは、知識は樹木に喩えられていました。知識には幹の部分と枝葉の部分があり、相互に結びついているのです。

B、百科事典の編集で最も重視されるのが、この幹と枝の関係です。事典の編者たちは、ある事項が他の事項に比べ

てどのくらい重要か、どの事項とどの事項がどんな関係にあるのかを繰り返し議論をします。百科事典を使い、C 図書館でさまざまな本を借り出してある事項について学ぶとき、私たちはやがて、個々の言葉の意味だけでなく、絡まり合う概念の関係を構造的に把握できるようになります。

D、インターネット上の検索システムは、こうした構造的な結びつきなどお構いなしに、私たちを一気に探している事項の情報に連れていきます。知識の幹と枝の関係など何もわからなくても、私たちは知りたい事項の詳しい情報を得ることができるようになったのです。これは、森のなかでりんこの木がどの木で、その実がどの枝についているのか知らなくても、一瞬でりんこの実が手に入る魔法のようなもので、実に便利ですが、(e) 私たちは最後まで自分がどんな森を歩いているのかを知らないままです。GPSのナビゲーションに従って車を運転していても、なかなか道を覚えないのでよく似ています。人々はネットワークで瞬時にして次々に必要な情報を手に入れることで、緩やかに形成される体系としての知識を見失っているのかもしれない。

こう考えてくると、インターネットには、知識の責任や体系性という面で、簡単には図書館にとって代わることのできない限界があるようにも思えてきます。それでは私たちは、インターネットを使うのをやめて本と図書館に戻ればいいのでしょうか。(f) 実は、そんなことはすでに不可能です。多くの情報がインターネットに依存している今日、ネット情報を拒否するだけでは何も始まりません。

(吉見俊哉『現代文化論―新しい人文知とは何か』出題に当たって一部を改変した。)

注1 ハンドルネーム インターネット上で本名の代わりに使う名前、ニックネーム。電子掲示板、SNSなどで使用される。

問一 傍線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、それぞれあとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

① ゲキゾウ

ア カンゲキを縫って進む。

イ ゲキテキな勝利を収める。

ウ 父親のゲキリンに触れる。

エ 敵にツイゲキされた。

オ カンゲキのあまり泣き出す。

② ヒンパン

ア 相手の動きにハンノウする。

イ 事故の件で相手とダンパンした。

ウ 荷物をウンパンする。

エ 調査のハンイを明確にする。

オ 土手に草がハンモする。

③ ショザイ

ア トウショの予定を変更する。

イ 古い手紙をショブンする。

ウ ショテイの期日までに提出する。

工 現代文化のシヨソウを概観する。
オ 会社でシヨムの仕事をしている。

④ トクメイ

ア 店員の説明にナットクする。
イ 社長はジントクのある人物だ。
ウ トクジツな人柄に惹かれた。
エ 情報源をヒトクする必要がある。
オ 発明品のトッキョを申請する。

⑤ ケンイ

ア 世界ランキングがジョウイになった。
イ 猛獣がイカクする。
ウ イカイの生き物のようだ。
エ 事柄のイサイを述べる。
オ 作品にはソウイや工夫が見られる。

問二 文中の空欄

A

D

にあてはまる言葉の最も適切な組み合わせを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-------|--------|--------|--------|
| ア | A—しかし | B—たとえば | C—さらに | D—ところが |
| イ | A—そして | B—ところが | C—あるいは | D—しかも |
| ウ | A—しかし | B—つまり | C—さらに | D—そのため |
| エ | A—または | B—たとえば | C—ところが | D—つまり |

問三

傍線部(a)「確かにこの二つの調べもののスタイルはよく似ています。」とあるが、どのような点が似ているのか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 図書館にある本や事典を調べることと、現地に実際に行って取材することは、実際に対象物を手に取る点と、直接相手に話を聞く点が、人間の調べる行為という点で同質である。
- イ 時間を無駄にせず簡単に情報を手に入れて調べることと、インターネットで情報を検索してレポートを書くために調べることは、いずれも手軽である点が酷似している。
- ウ 図書館で本や事典を調べて引用することと、インターネットで検索して得た情報を引用することは、自分で情報を探し出して引用して書くという点で類似している。
- エ 図書館の本の中から引用することと、インターネットからコピーすることは、文章作成において、不可欠なものとしてきた点で同類である。

問四

傍線部(b)「この二つの方法には、単に『便利になった』というだけでは済まされない違いがあるのです。」とあるが、この違いは何か。次の空欄 ① ・ ② にあてはまる言葉を本文中より抜き出し、それぞれ三字以内で答えなさい。

知識の ① が誰にあるのかという点や、知識の ② があるかどうかという点で違いがある。

問五

傍線部(c)「このこと」とあるが、それが指し示す内容として、最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア インターネットは知識の作り手を明らかにせず、特定の個人を隠蔽しようとする傾向があること。

イ インターネットで検索する情報は「誰かの知識」から「みんなの知識」に移行し、情報としての価値を消失する可能性があること。

ウ 図書館の本は知識の責任が特定の個人であるのに対して、インターネットではハンドルネームをもつ作者に知識の責任があること。

エ インターネットでは知識の作り手が個人であるというよりも、不特定多数によって知識が形成されること。

問六 傍線部(d)「私たちの知識が……と考えてしまうのは誤りです。」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、あとのア

～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰が書いたか、誰の知識かという認識は十五世紀半ばの本の出版に始まり、十七世紀以前は「著作権」や「作者」という概念はなく、高度な知識を誰でもが手に入れることができたから。

イ 歴史を振り返ると、著作権をもつ作者こそが知識の作り手であるとされていることが、十五世紀の出版物によってわかるから。

ウ 十七世紀以降になって作者という觀念が定着して、本の著作権制度もでき、それまで誰のものかわからなかった知識が明白な出所をもつようになったから。

エ 数百年前は知識の責任が誰にあるかは不明で、多くの知識は人々に共有されていたが、活版印刷の普及で特定の作者がその知識をさらに拡大していったから。

問七 傍線部(e)「私たちは最後まで自分がどんな森を歩いているのかを知らないままです。」とはどういうことか。最も適切な

ものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア インターネット上に溢れる情報の中で方向を見失い、自分がどこにいて何を調べているかわからないままであること。

イ どんなに知識の幹と枝の違いを探究しても、それぞれの事項の重要性を見抜くことができないこと。

ウ インターネットで情報を簡単に得たとしても、知識の重要度や知識相互の構造的な結びつきを把握することはできないこと。

エ インターネット上の検索システムで手当たり次第に多量の情報をかき集めても、相互関係を全く理解できず諦めること。

問八 傍線部(f)「実は、そんなことはすでに不可能です。多くの情報がインターネットに依存している今日、ネット情報を拒否

するだけでは何も始まりません。」についてあなたはどのように考えますか。本文の主旨を踏まえ、インターネットの活用の仕方について自分の考えを八〇字以内で述べなさい。

[illegible]